寿桂尼 女将軍「寿桂尼」を支えた香木の香り

◆直虎に劣らぬ女丈夫

戦国時代を描くことの多いNHK大河ドラマですが、2017年は「おんな城主直虎」、タイトル通り女性を主人公に据えています。魅力的な武将の影には聡明な女あり…。常々そう考えておりましたが、武将を支える立場としての女性ではなく、男性と対等に渡り合える女性にもスポットライトが当たるようになってきました。

といっても、今とは比較にならないほど女性の地位が低かった時代です。家系図にはまともに名前が残っていないことがほとんどで、今回取り上げる寿桂尼も、尼となる前の名前は定かではありません。しかしこの女性、直虎に劣らぬ女丈夫であることから、むしろこちらの方が主役級の人物といえるでしょう。かつては岸田今日子さんが、今回は朝丘ルリ子さんが演じています。

寿桂尼は、元は公家の出身でしたが、駿河国の大名今川氏親に嫁ぎ、少なくとも4人の子どもを産んでいます。夫である氏親が脳卒中で寝たきりになったのを機に、みずから政治に関わるようになったといわれます。氏親は10年以上にわたる病床にあり、まさに現代の要介護状態。半身不随で言語障害も残ったため、もはや当主の立場にあらず、でした。

◆今川家を実質的に守る

その氏親亡き後、寿桂尼は家督を継いだ氏輝の後ろ盾となるのですが、その氏輝もあっさり急死。そこで、出家をしていた三男を還俗（げんぞく）させ、後継者とします。これが今川義元、のちに桶狭間で信長に討たれる武将です。さらに、義元亡き後は、孫にあたる氏真が当主に収まるのですが、引き続き寿桂尼が国務を取り仕切っていた様子。いやはや、とんだゴッドマザーであったわけです。

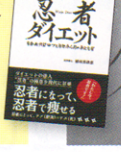
政略結婚が普通であったこの時代、信玄や家康に嫁を紹介し、武田家や徳川家と良好な関係を築くことで今川家を守り抜きました。寿桂尼が亡くなった途端に両家とも今川家を切り捨てていますから、盾となっていた寿桂尼の存在は想像以上に大きかったのでしょう。

◆リラクゼーションと強い気概

さて、その寿桂尼、当時今川家に身を寄せていた人質たちの世話も担っていたようです。人質といっても拘束していたわけではなく、いざというときの切り札でしたから、日頃は和気あいあいと女性同士、温泉に行ったり遊びに興じたりして過ごしていました。その遊びのひとつに「十炷香（じゅっちゅうこう）」がありました。これは、十種類の香木の香りを聞き分ける（お香は嗅ぐのではなく、聞くといいます）遊びです。

香木とは、インドやベトナムなどの熱帯地方に生息する沈香などの樹木が、風雪や菌などによってダメージを受けることで内部に樹脂を分泌・蓄積させるのですが、その樹脂を削り取ったものです。熟することで得も言われぬ香りを放出し、人々を楽しませていました。徳川家康が東南アジアへ向けて熱心に朱印船貿易を展開したのは、いったい何のため？ それこそまさに、香道の材料として貴重な香木を手に入れ、ひたすら香りで気分を和らげ癒されたいが故、であったのです。

今川の男どもが病弱だったり早死にだったりするのを尻目に、寿桂尼は80歳あたりまで生きたといわれます。その秘訣は、香を使ったリラクゼーションのうまさと今川家を守るという強い気概あってこそ。そのための気配りと人心掌握を得意とするのは、男性ではなくむしろ女性であることを堂々と証明してくれているのだと思います。

植田美津恵（うえだみつえ）

医学博士・医学ジャーナリスト。首都医校（東京）教授。愛知医科大学医学部客員研究員、日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に『江戸健康学』『戦国武将の健康術』など。近著『忍者ダイエット』も好評発売中。